

まぼろしの大寺”真行寺“

国 道126号の富田交差点を埴谷方面に向かうと、やがて前方に真行寺の集落が広がります。この後の丘陵にかつて壮大な寺院「真行寺」が

営まれていたことをご存知でしょうか？

創建は白鳳時代（七世紀末頃）と推定され、県内最古の寺院の一つです。全容は明らか



善光寺式阿弥陀三尊像

ではありませんが、金堂（本堂）や講堂、南大門等の跡が確認され、その規模は上総国分寺にひけを取らぬものです。最近、北西に隣接して大規模な建物群があつたことが確認され、かつての武射郡の郡衙（今日の市役所）跡と推定されることから、周辺が上総国を管理する北の拠点、たつたと考えて間違いなんでしょう。

ほとんどの古代寺院は律令体制の崩壊とともに、維持のための財源を失い、やがて衰退して行きます。真行寺も平安中期には創建当時の諸堂を失いましたが、廃絶したのではなく、明治の廃仏毀釈まではなく、江戸期には法灯を伝えます。江戸期には珍宝山真福寺の名で市内の名刹、光明寺の末寺として存在し、なお七間の本堂（薬師堂）、楼門（仁王門）、山王社などの伽藍を誇っていました。

二のように古代寺院「真行寺」が近年まで存続した理由として、中世期の復興があります。今日その過程は明らかではありませんが、鎌倉後期制作の「善光寺式阿弥陀三尊像」（県文）や延文3年



山王七尊懸仏

（一三五八）銘「山王七尊懸仏」などの優れた仏像が伝世し、さらには記録から文永3年（一二六六）に梵鐘を铸造したことなど、旺盛な再興のさまが窺えます。千葉寺、龍角寺など県内の他例からも、荒廃した古寺を千葉氏など中世に台頭する在地領主が再整備し、自分たちの氏寺化したことが知られますので、中世に当地方を領有したとされ、真行寺の古記録にも登場する印東氏（上総氏系）を庇護者と見るのも一案でしょう。5月11日（日）には「真行寺」の古代と中世を考える講演会が予定されています。皆さんぜひおいでください。

山武市文化財審議会委員
浜名 徳順